



筑摩世界文學大系

13

モンテーニュ

I

原 二 郎 訳



エセー

筑摩書房

筑摩世界文學大系 13

昭和四十八年三月五日

初版第一刷発行

モンテ・ニユ I

訳者 原 二 郎

発行者 井 上 達 三

発 行 所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0398 (製品) 20613 (出版社) 4604

目次

エ
セ
ー

原
二
郎
訳

第一卷（第一章—第五十七章）

5

第二卷（第一章—第十二章）

235

モン
テ
ー
ニ
ュ
に
つ
い
て

渡
辺
一
夫
訳

441

モ
ン
テ
ー
ニ
ュ
I

凡 例

本書に使用したテキストは *Les Essais de Michel de Montaigne*, éd. p. Pierre Villey, Paris, Felix Alcan, 1922, 3 vol. である。また *Les Essais de Michel de Montaigne*, éd. p. Fortunat Strowski et Gebelin, Bordeaux, F. Pech, 1906—1933, 5 vol. を参照した。

モンテーニュの「エッセー」は、一五八〇年に、九十四篇が二巻に分けて刊行された。それから八年を経て、一五八八年に、さらに十三篇が第三巻として刊行された。それと同時に、第一巻と第二巻に、ほとんど改作に近い大増訂がほどこされた。これが一五八八年版である。その後モンテーニュは、改版を目指して、一五八八年版の一本を常に座右に置き、余白に自筆で丹念な細字で次々と書き加えをして、死ぬ間際までその仕事をやめなかった。これがボルドー本といわれる原本である。今日の決定版であるボルドー市版はこの原本を元にして作られたものである。

訳文中、(a)は一五八〇年版のテキストを、(b)は一五八八年版における増訂の部分を、(c)はその後モンテーニュが自筆で加筆した部分を示す。

訳文中、前後に一行を明け、三字下げた箇所は主としてラテン語の韻文の引用である。行を明けずに《》印を付した箇所はラテン語の散文の引用である。いずれもテキストの体裁にならったものである。中に数箇所、ギリシア語、フランス語、イタリア語の引用のある場合は、その旨を注でこわった。引用の典拠はテキストにはないが、注において示した。本文の中で、モンテーニュが典拠とした著者の名前と著書の箇所も注においてできる限り示した。

注番号は章ごとに(1)から始め、長い章の場合は、組版の都合上、(99)に至って(1)から繰返すようにした。

本文のなかの「」は訳者の注である。

エセー

読者に

読者よ、これは正直一途の書物である。はじめにことわっておくが、これを書いた私の目的はわが家だけの、私的なものでしかない。あなたの用に役立てることも、私の榮譽を輝かすこともいっさい考えなかった。そういう試みは私の力に余ることだ。これは身内や友人たちだけの便宜のために書いたものだ。つまり彼らが私と死別した後に（それはすぐにも彼らに起こることだ）、この書物の中に私の生き方や気質の特徴をいくらかでも見いだせるように、また、そうやって、彼らが私についてもっていた知識をより完全に、より生き生きと育ててくれるようにと思つて書いたものだ。もしも世間の好評を求めるためだったら、私はもつと装いをこらし、慎重な歩き方で姿を現わしたことであろう。私は単純な、自然の、平常の、気取りや技巧のない自分を見てもらいたい。というの、私が描く対象は私自身だからだ。ここには、世間に対する尊敬にさしさわりがない限り、私の欠点や生れながらの姿があるままに描かれてあるはずだ。もしも私が、いまでも原始の掟を守りながら快適な自由を楽しんでいるといわれるあの民族の中に暮らしているのだつたら、きつと、進んで、自分を残る限なく、赤裸々

に描いたのであろう。読者よ、このように私自身が私の書物の題材なのだ。こんなにつまらぬ、むなししい主題のためにあなたの時間を費やすのは道理に合わぬことだ。ではご機嫌よう。

モンテ・ニニにて。千五百八十年三月一日。

第一巻

第一章

人はいろいろな方法によつて同じ結果に到達する

(a) われわれに対して怒つた人たちが復讐^{ふしゅう}を手にしてわれわれを自由自在にできるとき、彼らの心をやわらげるもつとも普通の方法は、降伏して、彼らの同情と憐憫^{れんきん}の情を動かすことである。しかし、この方法とまったく反対の勇敢と不屈がしばしば同じ結果を生んだこともある。

長い間、わがギュイエンヌ州を統治したウエールズ公エドワード¹は天性多くのすぐれて高邁な素質に恵まれたお方であるが、リモージユ²の人々からひどい損害をこうむつたので、その町を武力で攻め取つたときには、皆殺しにされる庶民や女子供の慈悲を乞う叫び声にも、足下にひれ伏して泣きわめく声にも、足を止めずに町の中へ押し進んだ。だが、そこにたつた三人のフランス人が信じられないほどの勇敢さで、勝ち誇る彼の軍勢を食い止めているのを認めると、それはどの目覚ましい勇氣に對する敬意と尊敬から、はじめて怒りの切先をやわらげて、この三人に免じてやつと市民全部を許す氣になった。

エペイロス公スカンデルベルグ³が部下のある兵士を殺そうとして追い廻したときに、その兵士は卑屈と懇願の限りをつくして公の怒りを鎮めようと試みたが、万策つき

で、最後に剣をとつて公に立ち向かうと決心した。この決心に主人の激怒はびたりと治まった。主人はかくも氣高い決意のほどを見て許したのである。この実例は、公の驚くべき武力と勇敢さを読んだことのない人には別の解釈をされるかも知れない。

皇帝コンラート三世はバヴァリア公ゲルフエンを攻囲したときに、いかなる屈辱的な降伏の申出も受けつけようとしなかった。せいぜい寛大な条件として、ただ、公と一緒に囲まれていた貴婦人たちがその名譽を傷つけれることなく、はだしのまま、身に持てるだけのものを持つて城を出ることを許した。すると彼女らは殊勝にも自分らの肩に夫や子供や公自身をも担いで出ようとした。皇帝はその氣高い勇氣を深く慕^慕して、嬉し涙を流し、それまで公にいだいていた激しい敵意をやわらげ、その後はずっと、公およびその一族を寛大に扱つた。

(b) これらの方法は二つとも容易に私の心を動かすだろう。私は憐憫と寛大に対しては驚くほど弱いからだ。もつとも、私は尊敬よりも同情のほうにより自然に負けそうな氣がする。だが憐憫はストア派にとつては悪い感情である。彼らは、悩める者を救うのは結構だが、それと一緒になつて心がくじけたり、悲しんだりしてはいけないと言っている。

(a) さて、これらの人々がこの二つの方法に攻め立てられ、試されると、一方の方法には毅然として堪えながら、他の方法には屈服するところを見ると、これらの実例は私にはいよいよ適切に思われる。あるいは次のように言えるかも知れない。「憐憫に心がくじけるのは情にもろく、お人好しの、柔らかな性格の結果である。したがって、女や子供や俗衆などの比較的弱い性格がこれにおちいり

第一章

(1) 一三〇〇—一七六。イングランドの皇太子。エドワード三世の子でリチャード二世の父。黒太子と称せられ、百年戦争で勇名を馳せた。

(2) フランス南西部、リムーザン州の首都。

(3) エペイロスはギリシア西部の地方。今日のアルバニア。

(4) 一四〇三頃—一六七。トルコの王政と戦つたアルバニアの民族的英雄。

(5) 一〇九三—一一五二。ドイツ王、神聖ローマ帝国皇帝のホーエンシュタウフェン家の基礎を定めた。

(6) ジャン・ボダン「歴史の方法」序文。

(7) セネカ「寛容について」五。

やすい。しかし、涙や懇願をさげすんで、ただ勇氣の聖なる像に対する尊敬のみに服するのは、強い不屈な魂が男らしい頑固な逞しさを愛慕し尊敬する結果である」と。しかしながら、それほど高潔でない魂の中にも驚嘆と感嘆の念が同じ結果を生むことがありうる。その証拠がテーパーの市民である。彼らはその將軍たちが規定の期限を越えて職権を継続したというのでこれを死刑にするために裁判にかけた。そのとき、このような非難の重圧に屈して、身を守るために哀訴と嘆願を繰り返すだけであつたペロピダスに対してはなかなか無罪にしようと言わなかつた。これに反し、堂々と自分の功績を述べ、(c)傲慢(a)不遜な態度で、國民がその恩を忘れてゐることをなしたエバマイノンダスに対しては、投票用の玉を手にとる勇氣さえなくなり、この人物の高邁な勇氣を声高に讃えて集會を解いた。

(c)大ディオニシオスは多くの時日と困難の末にレギオムの町を攻略し、この町を頑強に守つた偉大な人物である將軍のフュトン捕え、これを復讐のいたましい見せしめにしよとした。彼はまず、フュトンに向かつて、いかにして前の日に彼の息子と身内の者全部を溺死させたかを話した。するとフュトンは「彼らは私より一日だけ仕合せだ」と答えたのであつた。次にディオニシオスは彼を裸にし獄卒に命じて縛らせ、これを辱しめながらむごたらしく鞭打たせ、口汚い侮辱的な言葉を浴びせながら町じゅうを引きずり廻させた。しかし彼は少しも取り乱すことなく、常に変わらぬ勇氣をもちつづけた。そして毅然たる面持で、かえつて声を高めて、自分の名誉と光榮ある死の原因が、祖国を暴君の手に渡そうとしなかつたことにあることを思い起こさせ、ディオニシオス

オスの上に遠からず天罰がくだるであらうと脅かした。ディオニシオスは、部下の大部分の兵士たちの目に、この敗軍の將が、彼らの大將とその勝利を輕蔑して不遜な言葉を吐いたことを、憤慨するどころか、まれに見る勇氣にあつてにとられて心がくじけ、反乱を起こして獄卒の手からフュトンを奪おうとする気持ちにさへなりかけてゐるのを見てとり、拷問をやめさせ、彼をひそかに海へやつて溺死させた。

(a)まことに人間というものは驚くほど空な、変わりやすい、不定な存在である。人間について恒常齊一な判断を立てることはむずかしい。あのように、ポンペイウスはマメルティニ全部に大いに怒つてゐたのに、一市民ゼノンが公の罪を一身に引き受け、自分を罰するだけにとどめていただきたいと願ひ出た勇氣と氣概に感じて市民全部を許した。ところがスルラの客人はベルシア市で同じ勇氣を示したのに、自分のためにも他人のためにも何の得るところもなかつた。

(b)また、私のはじめの例と正反對の例であるが、もつとも豪胆で敗者に対してきわめて寛大だつたアレクサンドロス大王が非常な困難の末にガザ市に攻め入つたとき、そこを指揮してゐたベティスと出会つた。大王は攻略の間に彼の驚くべき豪勇の証拠を経験してゐたが、そのときのベティスはたった一人で部下からはぐれ、武器はちぎれ、満身血だらけ傷だらけになつて四方から打つてかかるマケドニア兵に囲まれながら戦いつづけてゐた。大王はほかにも数々の損害を受けた上に、すでに自分の身体にも二つの生ま生ましい傷を受けていたので、これほどに高くついた勝利にかつとなつて、ベティスに向かつて、「ベティスめ、おまえの望みどおりには死なせぬぞ。

(8) 前四〇一頃一三六四。テーパーの將軍、政治家。テーパーからスバルタの勢力を追ひ、また、エバマイノンダスとともにペロポネソスに遠征し、以後テーパー北方の征服につとめてゐるうちに戦死した。

(9) 前四〇一三二六。テーパーの政治家、將軍。スバルタを破つて、一時テーパーの覇權を確立した。のちマクドニアでアテナイ軍と戦つて勝つたが重傷を負ひ戦死した。人格高潔で雄弁にすぐれてゐた。

(10) プルタルコス倫理論集「自慢する方法」。

(11) 一世。スュラクサイの僭主。在位、前四〇五一三七六。カルタゴの勢力を駆逐しようとしたが失敗して和を結んだ。のち、ローマ、ギリシア本土にまで勢力をのばした。文芸を愛し、自らも詩作をした。

(12) シケリアの対岸、イタリアの長靴の先端にある町。

(13) デイオドロス・シクルス「歴史」一四の二九。(以下「歴史」を略す)。

(14) 前一〇六四八。ローマの政治家、將軍。はじめスュラ麾下の將軍としてシケリア、アフリカ、スペインで功を立て、さらにポンティス王ミトリダテス六世を破つた。前八二年、カニサル、クラッスとともに、第一次三頭政治を起した。のちカニサルと不和になり、ファルサロスの戦に敗れて死んだ。

(15) イタリアのカンパニア地方の傭兵の部隊。

(16) プルタルコス倫理論集「政治訓」。ゼノンとあるのはステノンの誤り。

(17) 前一三八七八。ローマの政治

捕虜をいじめるために考え出したあらゆる責苦を受けねばならぬことを覚えておけ」と言った。すると彼は顔色も動かさないうばかりか、傲慢不遜に構えて、この脅かしに一言も答えずに押し通した。アレクサンドロスはこの高慢でしぶとく沈黙を見て、「膝を曲げぬな。哀れな泣き言ももらさぬな。よし、おまえの沈黙を破って見せる。言葉を吐かせることができなければ、うめき声くらいは上げさせてやるぞ」と憤怒を狂暴に変え、彼の両の踵に孔をあけて綱を通し、これを生きながらに戦車につないで引かせ、身体をばらばらに引き裂かせた。豪胆ということは大王にとってはごくありふれたことであった。称讃に値しなかったから、それだけこれを尊重しなかったのであらうか。(c)それとも、豪胆は自分一人にだけ属するものと考え、これが他人のうちにこれほど見事に發揮されたのを見て嫉妬の情に堪えられなかったのだろうか。あるいはまた、生れつき怒ってかつとなる激情をどうしてもせきとめられなかったためだろうか。もしその怒りが制止できるものなら、テーバイ市の占領と掠奪の間に多くの勇士たちが潰滅し、一致して防禦する手段を失い、むごたらしく刃にかけられるのを目にしたときにも怒りを抑えられたにちがいない。現にそのときは六千人もの兵士が殺されたが、誰一人として逃げたり、助命を願ったりする者がなく、かえって、街路のあちこちに、勝ち誇った敵にいどんで、名誉ある死を求めて立ち向かっていた。いくら深傷を負っても、最後の息にあえぎながら復讐を試みない者はなく、絶望の刃をふるいながら敵の誰かを倒して自分も死ぬことに慰めを見いだそうとなしい者はなかった。しかし、彼らの勇気のいたましさは大王からいささかの憐憫もこうむらず、一日の長さは大王

の復讐欲を満足させるのに足りなかった。この虐殺は血の最後の一滴が流されるまでつづいて、武器を持たない老人や女や子供らのところに来てはじめて止んだ。それも彼らから三万人の奴隷を得ることを考えたためである。

第二章 悲しみについて

(b)私はこの感情をもつとも免れている者の一人である。(c)そしてこれを好みもしないし、尊重もしない。ところが世間の人々は、まるで当然のこのように、これに特別な好意を寄せて尊敬している。この着物で知恵、徳性、良心を飾っている。実にばかげた奇妙な装いだ。イタリヤ人が悪意をこの名前で呼んだのはいつそう適切である。なぜなら、それは常に有害で、狂気じみた特性であって、ストア派は常に臆病で卑しいものとして彼らのいう賢者にこれを禁じているからである。

しかし(a)次のような話がある。ペルシア王カンビュセスに敗れ捕虜となったエジプト王プサメティクスは、捕われた娘が奴隷の服装で水汲みをさせられて自分の前を通るのを見ながら、並みいる友人たちがまわりで泣き悲しむ中で、目を地面にそそいだまま一言も言わずにじつと立ちつくしていた。それから間もなく、息子が死刑に連れ去られるのを見たときも、同じ落着きを押しとおした。だが臣下の一人が捕虜の中にまじって連れてゆかれるのを見ると、はじめて自分の頭を叩き、ひどい悲しみを表わした。

この話は、最近わが国のある公爵に起ったことに匹敵しよう。この公爵はトレントにあって、一門全体の柱石

家、将軍。門閥派の代表者。はじめマリウスの部下だったが、のち彼と敵対し彼に勝ってローマの支配者となった。マリウスの残党を掃蕩し元老院の勢力を強化するために極端な恐怖政治を行なった。のち、引退生活に入ったが一年後に病死した。

(18) プラエネステの誤り。ローマの東約二キロにある町。
(19) プルタルコス倫理論集「政治訓」。

(20) バレステイナの海岸近くにある町。
(21) タイントクス・クルティウス「アレクサンドロス大王の事蹟」四の六。

(22) デイオドロス・シタルス、二七の四。

第二章

(1) イタリヤ語の *lusinga* には悲しみと悪意の二つの意味がある。
(2) カンビュセス二世。古代ペルシアの王。在位、前五三〇—五二二。キュロス王の長子。
(3) プサメティクス三世。古代エジプトのサタス王朝の最後の王。カンビュセス二世に敗れた。
(4) シャルル・ド・ギューイズ。一五二四—一七四〇。フランスの枢機卿、フランスの大司教。兄のフランソワとともにギューイズ一門に重きをなした。
(5) イタリヤ北部の地方。

であり名譽であつた兄君の訃報に接し、そのすぐあとに、第二の希望であつた弟君の訃報を受けたとき、この二つの打撃を模範的な氣丈さをもつて堪えたが、数日後に臣下の一人が死んだとき、この最後の出来事に負けて、これまでの剛毅さを捨てて悲嘆と愛惜の涙にくれた。そこである人々は、彼がこの最後の打撃ではじめて心に痛手を受けたのだと推論した。しかし本当は、すでに悲しみに満ち溢れていたから、ほんのわずかのおまけの刺激で、忍耐の堰が切れたのである。もしも、前の話に次のようなつけ加えがなかったらこれと同じような判断を下すことができたであらう（と私は思う）。そのつけ加えといふのはこうである。カンビュセスがプサメニティコに向かつて、息子と娘の不幸には心を動かさなかつたのに、友人の不幸にどうしてあんなに我慢ができなかつたのかとたずねたところ、「この最後の悲しみだけは涙で表わせるが、前の二つを表わすことはいかなる手段をもつてしても遠く及ばないからだ」と答えた。

あの古代の画家の工夫もおそらくこれと同じことである。彼はイフィゲニアの犠牲の中で、並みいる人々の悲しみを、この純潔な乙女の死に寄せる関心の度合いに応じて表現しようとしたが、いよいよ娘の父親を描く段になつて、あらゆる技巧を使い果たしてしまつたので、ただ顔を覆っている姿に描いた。ちよいどいかなる姿もこれほどの悲しみを表わしえないかのようにあつた。だから詩人たちも、先に七人の息子を、次いで同じ数の娘を失つて、痛手に打ちひしがれている母親のニオベを、ついに岩に化したと想像したのである。

悲しみのために石と化した。

それによつて、彼らは、われわれの力を越えるいろいろな出来事に圧倒されたときに呆然として声も出せず、耳も聞こえなくなるあの沈鬱な痴呆状態を表現しようとしたのである。

実際、悲しみの力が極まると精神全体を驚愕させ、その自由な働きを妨げる。たとえば、われわれはひどく悪い知らせにはつと驚くと、何かに押えつけられ、身内が凍つて、全身が動かなくなつたように感じるが、そのあとで悲嘆の涙にくれて心がゆるんでくると、はじめて束縛から解き放されて、自由な楽な気分になることがある。

(b) そしてついに悲しみはようやく声に道を譲つた。

(c) フェルナンド王がハンガリー王のジャンの未亡人とブダのあたりで一戦を交えたとき、ドイツ軍の隊長ライジャックは、この激戦で目覚ましい働きを示した騎士の遺骸が運ばれて来るのを見て、共に哀悼の意を表した。しかし皆と同じように、彼が何者であるかを知りたいと思ひ、武器を脱がされた姿を見ると、ほかならぬ自分の息子であるとわかつた。居並ぶ者が涙にくれるうちに、彼だけは声も上げず、涙もこぼさず、じつと立ちつくして、目をこらして息子を見つめていたが、ついに悲しみに生命が凍りついて、地面にぱたり倒れてそのまま息を引き取つた。

(a) 焦げ工合を言ひうる者は弱い火に焼かれている者だ、

- (6) ギュイーズ門のフランソワ・ド・ロレーヌ。一五一九—一六三三。プローニュ攻城で得た戦傷のため、「向う傷」と渾名された。アンリ二世の下でカル五世と戦つてメッツを守り、またイギリス軍から最後の拠点であるカレーを奪取した。フランソワ二世に姫を嫁がせ、弟のシャルロットに摂政カトリック・ド・メディシスに親近し、宮廷内で権勢をほしいままにした。宗教戦争では旧教徒の首領として活躍したが、オルレアンで刺客に暗殺された。
- (7) 長兄と同名のフランソワ・ド・ロレーヌでクリュニーの僧院長であつた。
- (8) トロヤ遠征に向かつてアテナイ軍の総大将アガメムノンの娘、アテナイ軍がアウリスの海岸で女神アルテミスの怒りにふれて、風が止まつて立往生したとき、アガメムノンは娘を呼びよせて女神の犠牲に供えようとした。女神はこれを憐んで蛇鹿の身代りして彼女をさらして自分の巫女とした。
- (9) ギリシア神話のタンタロスの娘。沢山の子供をもつことを女神に誇つたために、女神の怒りにふれて子供を全部射殺された。彼女は悲しみのあまり山の石と化した。
- (10) オウイディウス「メタモルフォセス」四の三〇四。
- (11) ウェルギリウス「アエネイス」二の「五一」。
- (12) フェルナンド一世。一〇六五年歿。カステイリヤおよびレオンの王。
- (13) パウロ・ジョヴィオ「現代史」三九。
- (14) 原文イタリア語。ペトラルカ「十四行詩」一三七。

と恋人たちは言つて、堪えがたい恋の焰をこう表現しようとする。

恋はあわれな私からすべての感覚を奪つた。なぜなら、レスビアよ、私はおまえに会うと、とたんに理性を失い、言うべき言葉も知らず、舌はもつれ、えも言われぬ火が五体に拡がり、耳は鳴り、目は闇に閉ざされるからだ。

(b) このように激しく焼けつくような興奮のさなかにあるときは、悲嘆や口説きを十分に拡げてみせるのには適しないのである。そのとき、精神は深い物思ひに悩み、肉体は恋にひしがれやつれているからだ。

(a) そういふわけで、ときどき偶然に、突拍子もないときに、恋人たちが気絶したり、極度の情熱のあまり、喜びの最中にさえ無感覚に襲われたりすることがある。味わったり、消化したりできる情熱はすべて平凡なものではない。

軽い悲しみは語り、深い悲しみは沈黙する。⁽¹⁵⁾

(b) 思いがけない不意の喜びも、同じようにわれわれをびっくりさせる。

彼女は近づく私をみとめ、あたりにトロヤの武器を見て、大きな奇蹟に打たれ、茫然として石と化して、体が冷たくなった。彼女は氣を失い、しばらくしてようやく言葉を発した。

(a) カンナエ⁽¹⁶⁾の敗北から思いもかけず帰つて来た息子を見つけて喜びのあまり死んだローマの婦人や、嬉しさのために死んだソフォクレスや僧主ディオニュシオスや、ローマ元老院から送られた名誉の知らせをコルシカで読んで死んだタルナ⁽¹⁷⁾のほかに、われわれの時代には、法王レオ十世⁽¹⁸⁾が渴望してやまなかったミラノ占領の報に接し、歓喜のあまり熱を出して死んだことが伝えられている。古代人も人間の愚かさのさらにいちじるしい証拠として、弁論家のディオドロスが自分の学校で公衆を前にして、しかけられた議論にうまく答えられなかったことを、ひどく恥かしく思い、その場で息絶えたことを指摘している⁽¹⁹⁾。

(b) 私はこういう激しい感情にはとらえられない。私は生れつき血のめぐりが鈍い。そしてそれを毎日理性によつて硬くし、厚くしている。

第三章

われわれの感情はわれわれを越えてゆくこと

(b) 人間がつねに未来のことにばかり見とれるのを非難して、「われわれ人間は未来のことは過去のこと以上に無力なのだから、現在もっている幸福をつかんで、それに満足せよ」と教える人々は人間の犯す過誤のもつとも普通のものに触れている。ただし自然自らがその仕事を継続させてゆくためにわれわれを仕向けている事柄をも、あえて過誤と呼ぶものと仮定してである。(c) 彼らは、自然がわれわれの知識よりも行動のほうを渴望して、われわれの中に他の多くの考えと共に、この誤った考えを

(15) カトウルス、三の五。

(16) セネカ「ヒッポリュトス」二の三の六〇七。

(17) ウェルギリウス「アエネイス」三の三〇六。

(18) 南イタリア海岸にある都市。ここで前二一六年、ローマ軍がハンニバルに大敗した。

(19) 前五世紀のギリシアの大悲劇詩人。

(20) 在位一五三—一二。法王として手腕をふるつた。

(21) グイットチアルディニ「イタリヤ史」一四。

(22) プリニウス「博物誌」七の五四。

刻み込んだと考えるのである。(b)われわれはけつして自分のもとにいないで、常に自分の向うにいる。不安や欲望や希望は、われわれを未来に押しやり、将来のことにしかもわれわれの死後のことに、心を煩わせて、われわれから現にあるものについての感覚や考慮を奪い去る。

(c)《未来を思い煩う心は不幸である。》

「汝のことをなし、汝自身を知れ」という偉大な教訓はプラトンの中にしばしば述べられている。この命題の二項は広くわれわれの義務のすべてを含み、各項が同じようににたがい他の項を含んでいる。つまり、自分のことをしようとする者は、自分が何であり、自分の特質が何であるかを知ることが第一の務めだと知るであろう。また、自分を知る者は、もはや他人の仕事を自分の仕事とは考えずに、何よりも自分を愛し、自分を磨き、よいいな仕事や無益な思考や計画を拒む。《暗愚は欲望がかなえられても満足しないが、知恵は現にあるもので満足し、けつして自己に不満をもたない。》

エピクロスは、彼のいう賢者は未来の予想や心配をしないと言っている。

(b)死者に関する法律のうちで、帝王たちの行為はその死後において検討されねばならぬときめた法律は、たいへん立派だと思ふ。帝王たちは法律の主人でないまでもその友であるからだ。正義が帝王たちの生前にその頭上にふるうことのできなかつた力を、彼らの死後の評判の上に、後継者たちの幸福の上に、ふるうのは道理にかなっている。これらのものはしばしば生命よりも重んじられるからである。この慣習は、それが実施されている国民には非常な利益となり、善良な帝王たちには歓迎すべきものとなる。(c)彼らは邪惡な帝王たちの思い出と混同

されるのを迷惑がる十分の理由をもつからである。われわれはどんな帝王にもひとしく隷属と服従の義務を負っている。なぜなら、それは彼らの職權に関することだからである。だが尊敬とか、まして情愛とかの義務は彼らの徳性にしか負つていない。国家の秩序のためとあれば、帝王としてふさわしくない者をも我慢して堪え、彼らの支配がわれわれの助力を必要とする間はその欠点を隠してやり、可もなく不可もない行為をも誉めちぎって立派に見せることは認めてやつてもよい。しかし彼らとかかわりがなくなつたあとに、正義とわれわれの自由に對して、われわれの真実の感情の吐露を拒むのは正しくない。とくに、主君の欠点を熟知しながら尊敬と忠誠をもつて仕えた榮譽を善良な臣下に拒むことは正しくない。これではきわめて有益な手本を子孫から取り上げることになる。また、何かの個人的な恩義を受けたために、誉める値打のない帝王の思い出に不当に味方する者は、個人の義理のために公の正義を損う者である。ティトゥス・リウィウスが、「帝王の下に養われた人間の言葉は愚かな虚飾と空虚な証言に満ちている。めいめいが帝王を無差別に有徳至高の極限にまで持ち上げるからだ」と言つたのは正しい。

皇帝ネロに面と向かつて、恐れる色もなく返答した二人の兵士の氣位の高さは非難されても仕方がない。その中の一人は、なぜ自分に危害を加えようとしたかと問われて、「私はあなたが愛されるに値した間はあなたが愛した。だがあなたが親殺し、放火人、香具師、馬丁となり下がつてからは、それなりにあなたを憎んだ」と答えた。もう一人の兵士は、なぜ殺そうとしたかと問われて「あなたの不断の悪行にはほかに葉がないから」と言つ

第三章

- (1) セネカ「書簡」九八。
- (2) キケロ「トウスクラム論議」五の一八。
- (3) 前三四二項—二七一項。ギリシアの哲學者。エピクロス派の祖。精神的快樂を最高善とした。
- (4) キケロ「トウスクラム論議」五の一六。
- (5) 前五九—後一七。ローマの大歴史家。アウグストゥス帝の保護の下に、四十年を費して「ローマ建國史」百四十二巻を著わした。これはローマ建國から紀元前九年にわたるローマの歴史である。
- (6) ティトゥス・リウィウス「ローマ建國史」三五の四八。(以下「ローマ建國史」を略す)。
- (7) ローマ皇帝。在位五四—六八。若年にして皇帝となり、始めセネカの後見のもとに善政を行なつたがのちに不徳と暴虐の限りをつくした。

た。しかしながらネロの死後に、その暴戾悪辣な所業について万人が口をそろえてした証言、そして今後も永久になされるであろう証言に対しては、分別ある者なら誰も非難はできないであらう。

ラケダイモンのような神聖な政治の中に、一つのはなはだしい見せかけの儀礼がまじっているのは残念なことである。つまり、王が死ぬとすべての同盟者や隣人やすべての奴隷が、男も女も入りまじって哀悼のしるしに、自分の額に傷をつけて泣き叫びながら、実際はどんな王であつたとしても、あらゆる王のうちでもっともよい王であつたと声をそろえて言う習慣があることである。こうして彼らは、勲功に与えるべき称讃を王という地位に与え、最上の功績に与えるべきものをもっとも下位の卑しむべき地位に与えたのである。あらゆる問題を論じたアリストテレスは、ソロンが「何人も死なないうちは幸福とは言えない」と言つたことについて、立派に生き、かつ死んだ人でも、もし死後の評判が悪く、子孫が不幸だつたら幸福といえるかどうかと問うている。われわれは生きている間は、先廻りをしとこへでも好きなところに行ける。だが死んでしまえば現にあるものとは何のつながりもなくなる。したがつてソロンは「人間はけつして幸福になれない。なぜなら、人間は死んだ後でなければ幸福ではないのだから」と言つたほうがよかつたであらう。

(b)人は誰でも、「死ねば」自分が生命から完全に引き離され投げ出されるのだと信じない。そして、無意識のうちに、自分の後に何が残ると考へて、投げ捨てられた死体から自分を解き放

すことをしない。

(a) ベルトラン・デュ・ゲ克蘭は、オーベルニュのピュイの近くにあるランコンの城を攻略しているうちに戦死した。そのあとで、降参した籠城軍は、デュ・ゲ克蘭の屍の上に城の鍵を捧げさせられた。

ヴェネツィア軍の総帥バルトロメオ・ダルヴィアノがブレシアノ地方の戦闘中に死んで、その遺骸をヴェネツィアに運ぶに当たり、敵地であるヴェローナを通らねばならなかつたときに、大部分の将士はヴェローナの人たちに通行証を出してもらうように頼むのがよいという意見を出した。しかし、テオドロ・トリウオルツィオはこれに反対して、まさかの場合は一戦を交えても武力で通るほうを選んで、「生前に一度も敵を恐れたことのない人が、死後に敵を恐れるふうを見せるのはふさわしくない」と言つた。

(b) 実際は、これと似た事柄で、ギリシアの法律では、敵に対し埋葬のために死体を収容することを要求した側は勝利をあきらめたものとして、戦勝の標柱を建てることを許されなかつた。そして要求された側に勝利の名目が与えられた。こうしてニキアスはコリントス人から得た明らかな勝利を失つた。反対にアゲシラオスはボイオティア軍に対するはなはだ怪しい勝利を確実なものにした。

(a) このような事柄は、もしも、われわれが自分の来世のことまで思い煩うだけでなく、神の恩寵が墓場にまでついて来て引きつづき遺骨にも及ぶという考へ方がいつの時代にも認められていなかつたとすれば、不思議に思われるかも知れない。これの実例は古代にはいくらでも

(8) タキトゥス「年代記」一五の六七および六八。

(9) 古代スバルタの別名。

(10) ヘロドトス「歴史」六の六八。(以下「歴史」を略す。)

(11) 前六四〇頃一五六〇頃。ギリシアの政治家、詩人。ギリシア七賢人の一人。

(12) アリストテレス「ニコマコス倫理学」一の一〇。

(13) ルクレティウス「事物の本性」三の八七七。(以下「事物の本性」を略す。)

(14) 一三二〇頃一八〇。フランスの将軍。百年戦争で活躍した英雄。最後はイギリス軍を攻略中に戦死した。

(15) ダイッテチャルディーニ「イタリヤ史」一一。

(16) 前五世紀のアテナイの政治家、将軍。富裕の出であつたが民主的で、親スバルタ政策をとり、好戦派と対立した。のち、心ならずもシケリア遠征の司令官に任ぜられ、スバルタに敗れて処刑された。

(17) 前四世紀のスバルタ王。ギリシア諸都市をベルシアから解放するために小アジアの各地に転戦した。エバメイノンダスと戦つて祖国の急を救つた。のち、エジプトに出征、帰国の途中に歿した。

(18) プルタルコス英雄伝「ニキアス篇」六、および「アゲシラオス篇」一九。

あるので、わざわざここに詳説する必要もないくらいであるが、ただ次にあげる例だけは特別である。イギリス王エドワード一世はスコットランド王ロバートとの長期にわたる戦争の間に、自ら先頭に立つて戦ったときには常に勝利を得たことから、自分の存在が味方の戦闘にきわめて有利であることを経験していたので、死に臨んで皇太子に向かい、自分が死んだら遺骸を煮て肉と骨をばらばらにほぐし、肉は埋葬し、骨はとっておいて、スコットランドと戦争をするたびに携えて行つて将兵のそばにおくようにせよと命じておごそかに誓いを立てさせた。まるで運命が勝利を彼の五体に結びつけているかのようであつた。

(b) ウィクリフの異説を守るためにボヘミアを混乱させたヨハン・ジシムカは自分の死後に皮を剥いで太鼓を作り、敵と戦うときに持つてゆくように命じた。そうすれば、彼が指揮して得た勝利を持続しうると考えたからである。同様に、あるインド人たちは、スペイン人との戦争に、彼らのある酋長が生前に武運が強かったというので、その遺骨を携えていった。また、同じ大陸に住む他の種族は、戦争で死んだ勇士たちの屍を引きずって行つて武運と激励の役に立てようとした。

(a) はじめの諸例は過去の行為から得た評判を墓にとどめておくにすぎないが、後の諸例はそこに何か働きかける力を加えようとしている。隊長バイヤールの例はさらによい例である。彼は火繩銃に打たれ、致命傷を受けたことを知ったが、戦線から退くようにとすめられると、今わのきわに敵に背を向けることはしないと答えた。そして、力の限り戦つて、気が遠くなって馬から落ちそうになると、別当に命じて樹下に身を横たえさせた。ただ

し、顔を敵に向けて死ねるようにと命じて、そのとおりにして死んだ。

これに関連して、前のいづれにも劣らぬ珍しい別の例をつけ加えねばならない。今の国王フエリベの曾祖父に当たるマクシミリアン帝は天性多くのすぐれた資質に恵まれていたが、とくに肉体の美しさは無類だった。ところが、彼の気質の中には、いそがしいときにはどんなに重要な政務も、便器を玉座代りにして片づける帝王たちの無造作さと正反対のところがあつた。つまり、どんなに心安い従僕にも、自分の廁にいる姿を見ることを許さなかつた。小便をするにも隠れてしたし、人が通常隠しておく箇所を、医者にも誰にも見せまいとして処女のようにに小心に気をくばつた。(b) 私はどうかというと、ずいぶん恥知らずな口を利くが、やはり、生れつきこの羞恥の念をもっている。とくに必要に迫られ、情欲にそそられた場合は別として、われわれの習慣が隠しておくように命ずる部分や行為を人の目にさらすことはほとんどない。この点では、男子として、とくに私のような職にある男子として、十分以上に遠慮気兼ねをしている。しかしマクシミリアン帝の、(a) その神がかりな羞恥はいよいよひどく、とうとう、遺言書に、自分が死んだら股引をはかせるようにと命ずるまでになった。それならいっそのこと、追加として、自分に股引をはかせる者は目隠しをすること、と書き加えるべきであつたらう。(c) キュロスが子供たちに命じて、精神が肉体から離れた後は、彼らも、ほかの誰も、自分の肉体を見たり、触れたりしてはならぬとしたことを、私は彼の何かの信仰心のせいだと考える。というのは、彼の伝記作者も彼自身も、もろもろの偉大な特質の間に、その生涯のいたるところに宗

(19) イギリス王。在位八九九—九二四。

(20) ジャン・ウィクリフ。一三八四年生れ。イギリス宗教改革の先駆者。

(21) 一三七〇頃—一四二四。ボヘミアの国民的英雄。チエコの教会改革者であるフス派の軍の首領として活躍した。

(22) アメリカ大陸のインディアンを指す。

(23) 本名ビニール・デュー・テラヌ。一四七三—一五二四。フランスの軍人。シャルル八世、ルイ十二世、フランソワ一世の三代に仕え、イタリア戦争に参加して勇名を馳せた。

(24) 神聖ローマ皇帝カルル五世の子でスペイン王。在位一五五六—一五九八。

(25) 一世、神聖ローマ皇帝。在位一四九三—一五一九。

(26) キュロス二世、前六世紀のペルシアの大王。西アジアの全部を征服した。

(27) タセノフォン。

教に対する異常な熱意と敬虔の念をのぞかせているからである。

(b) ある高貴なお方が、私の姻戚で平時にも戦時にもかなり有名な人について、私にしてくれた次の話はいやな話である。彼はその高貴なお方の宮廷で、老齢になってから、結石のひどい痛みで悩んで、いよいよ死のうとするときに、異常な熱心さで、残った最後の時間を全部使って、自分の埋葬の名譽と葬儀の段取りをし、見舞いに來たすべての貴族に葬式に列席することを約束してくれと頼んだ。最後の様子を見舞いに來られた宮様に向かつて、宮家全体に葬儀に参列するように命じてもらいたいとしきりに懇願し、たくさんの例や理由を挙げて、それが自分のような者にふさわしいことを証明した。そうして、その確約を得、葬儀の手筈や順序を心ゆくまで指図したあとで、安心したように息をひきとつた。私はこれほど執拗な虚栄心をあまり見たことがない。

これと反対の別の執着の例も、私の身内に事欠かないが、やはり今述べたものと同類だと思う。つまり、自分の葬儀に特別に異常な儉約をして、従僕は一人、灯籠は一個とぎりぎりまで切りつめようとする執着である。私はこういう考え方が称讃されるのを見た。また、マルクス・アエミリウス・レピドゥスが後継者たちに世間の慣習となつてゐる葬儀を自分に用いるのを禁じたことが称讃されるのを見た。だが、死後のわれわれが享樂することも認識することもできない出費や贅沢を遠ざけることも、やはり節制とか質素とかいふべきものだろうか。こんな改革は容易で、大した苦勞を要しないものだ。(c) もしも葬儀について前もって指図をしておかなければならないなら、私はその規模を人生のあらゆる行動と同じよ

うに、各人がその境遇に応じて定めたらよいと考える。哲學者リユコンは賢明にも、友人たちに、自分の遺骸は彼らがもつともいいと思う場所に埋めるように、また、葬儀は贅沢でも貧弱でもないようにと命じた。(b) 私はそれについては慣習の命ずるところにお任せする。そして誰であろうと自分が世話になる人たちの決定にお任せする。(c) 《このことはすべてわれわれにはどうでもよいことだが、あとに残る者には無視できないことである。》ある聖人は聖人らしく言つた。《葬儀への配慮、墓所の選択、葬式の盛大さは死者の救いというよりはむしろ生者の慰めである》と。だからソクラテスも、最後に臨んでどのように葬られたいかとたずねたクリトンに、「おまえの好きなように」と答えた。(b) 私は、もしも前からそのことに心を用いなければならぬとすれば、生きて息をしているうちに自分の葬儀の盛大や名譽を享受しようとして、大理石に彫つた自分の死顔を見て喜んでゐる人たちを真似るほうがずっとふさわしいと思う。無感覚によつて自分の感覚を喜ばせ、死によつて生きることをできる人々は仕合せである。

(c) 私は民主制をもつとも自然でもつとも公正だと思ふにもかかわらず、アテナイの市民のあの非人道的な不正を思い出すと、あらゆる民主制に対し、許しがたい憎惡をいだきそうになる。彼らはアルギヌサ島の近くで、スパルタ軍との間に、これまでギリシア人が海上でおこなつたうちでもつとも頑強で激烈な海戦から凱旋してきた勇敢な隊長たちを、一刻の猶予も与えず、弁解を聞くこともせずに、死刑にした。その理由は、この隊長たちが勝利のあとで、兵法上の好機を追うことにばかり氣をとられて、船を停めて味方の死体を収容し埋葬することを

(28) 前七八年のローマの執政官。同名の第二次三頭政治の執政官の父。

(29) 前三世紀のトロヤ生れの道徳学派の哲學者。

(30) デイオゲネス・ラエルティオス「哲學者列伝、リユコン篇」五の七四。

(以下「哲學者列伝」を略す)。

(31) キケロ「トウスキュム論議」一四五。

(32) アウグスティヌスを指す。

(33) アウグスティヌス「神の国」の一〇二。

(34) プラトン「パイドン」二六A。

(35) エーゲ海のケオス島の近くの島。